

第四部 だいよんぶ 第三話 さんじわ 妖術をつかう熊野の川がに ようじゆつ くまのかわがに

やぐもじんじゃ やぐもじんじゃ 八雲神社が、 きようづかやま 教塚山にあつたところのお話 はなし。

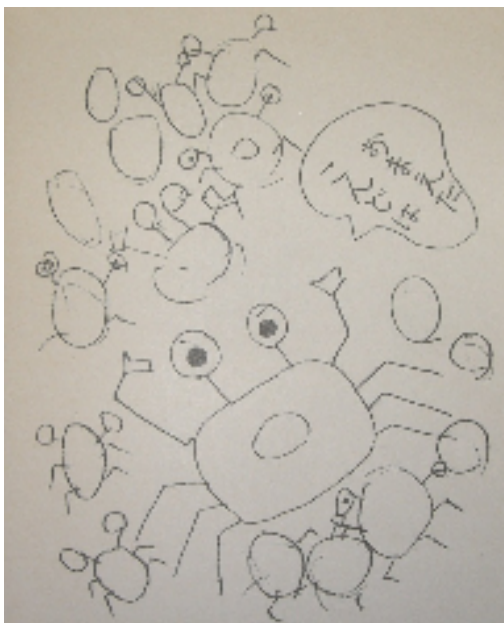
むかしむかし、 きようづかやま 教塚山の登り口 のぼぐち に、 くまの 熊野という所 ところ があつたんや。その前 まえ を小川 おがわ が流れ、 やま 山の した 下 まわ を回り回 まわ って彦良 ひこら に至 いた り、 みずうみ 湖 みずうみ にそそいでいたんや。

のぼぐち 登り口 くまの の熊野には、 ふくい 福井の石 いし で作 つく った六枚 ろくまい 橋 はし があつて、

この橋 はし は、 へいあんじだい 平安時代に造 つく った橋 はし なそうな。その橋 はし 下 した にはな、

かわ 川 す がにの住 す み地 ち があつて、 ごまんびき 五万匹 ごまんびき ものか もの にか か がおつたそうな。

その中 なか にはボスが ボス にか か いてな、 めいじ 明治の中 なか 頃 ころ まで ようじゆつ 妖術 ようじゆつ を



つか ひとびと
使つて人々をだましておつたんやと。

ようじゆつへんか はなし
妖術変化の話 第一話

ある夏の、とても暑い土曜日の昼すぎ、旅のひとが、山の奥の神社にお参りになつて、六枚橋の近くまできたんやと。すると、急に夕立が降り出しおつて、

こま 困つておつた。すると、六枚橋のまん中に新しい傘が

にほんお 二本置いてあつたそうな。そこで、いっぽんか 一本借りようと思ひ、

てだ 手を出したところ、不思議なことに、にほんかさ 二本の傘が、ちよつと

とお 遠ざかり、また手を出すと、またちよつと遠ざかり、とうとう

はした 橋の下へ、降りていってしまひよつた。



しかしのう、その旅の人も、えろうしつこい人やって、さらにさらに追っていったんや。すると、傘は急に小さくなって、かに穴に入ってしまったそうなの。

ようじゆつへんか はなし
妖術変化の話 第二話

ある日、一人の百姓が田んぼの草を刈りに行ったときのお話じゃ。

あまりに鎌が切れないので、困っていると、田んぼの横のあたりに新しい鎌が置いてあったんや。ちよつと借りようと思つて、鎌があるところまで行つてみると、鎌が独りでに動きだしたんや。「風一つないのに、なんで動くんやろう。」と、不思議に思い、鎌を追つていたところ、六枚橋のかにの住み地のところで、急に吸いこまれるように、小さくなってしまったそうなの。

ようじゆつへんか はなし
妖術変化の話 第三話

ある時、大変欲張りな男が、六枚橋の下の川の中が、

とても美しいので、みとれていたんや。するとその流れに、大判、

小判がサラサラと音をたてて流れてきたそうな。欲張りな男は、

「これはもつたいない。」と、着物もはき物も着けたまま、拾いに

入ったんだと。

すると、大判、小判は逃げるようにあっちのカニ穴、こっちのカニ穴へと、かくれて見えなくなつてしまったそうな。欲張りな男は、夕方まで、一日中川を上ったり、下がったりして、着物もはき物もむちゃくちゃになつてしまい、とうとう一文もとらずに、夕方になつてしまつたんじやと。それ



で、う、さすがの欲張よくばりな男おとこも大おおごえ声こゑを出だし、泣なきわめき村むらびと人ひとたちの笑わらい者ものにとうとうなつたとき。
という話はなしなんや。

